藪椿

三筋町の通人

驅落の驅落

饗庭篁村

藪椿

第一回

貧は諸道の妨げと歎く者あれば窮は文章を巧にすると歎息して水を飲む者あり歎く者は廣き世界を狹く見たるなり樂むといふは空とぼけ葡萄は酢はいの負惜みならん自ら甘んじるといふには有らねど辛き世間に付合に習はぬゆゑに習ひ得し書に迚も入谷の里深見魚淵といふ貧き書師あり元は文人墨客を悦びしが西京に遊びて土佐の古風を學び中ころ商賢故實に感じて容齋派となり今は諸流を折衷して別に自ら一種軸を用すと高く唱へし枯木寒鴉先生是では餘り淋しうございますから最う二三羽お飛はせ下さいと無雅なる輩人の詞に筆を捨て溜息吐くことも多しとぞ柄まだ咲かぬ南窓押開けて打眺むる其人の柄は四十に足らず痩たる顏に笑を含み鳥帽を筆下に走らせ天地を紙絹の間に包み春りとは知られたり女房お鈴は朝より夕まで神を外さぬ綺麗好き夫は机の廻りを紙屑籠同樣にする癖好き是で睦しきが不思議なり近所の女の子が二三人遊びに來て居たりしが姉樣事のお客ゴッコのと取騷ぎ手事のみなれば お鈴はホッと持餘してアラお前達は今其所を掃いたばかりなのに最う其樣に塵にして困りますネお客さんの御家はお庭も廣し日あたりのよいのに何故此家へ來てお遊びなさる冒險で裏うございませうにと云へばお客といふ十一二の遊び頭が飯事の手を止めて此方を振り向きデモ伯母さん伯母さんの家は暖かで有らうと思ひますソ、何故、アノ私の目には見ませんが他の人が伯母さんの家は火が降ると云ますよト跡先構はぬ口まめ鳥囀り散らして立歸ればお鈴はションボリ立たまゝ坐りもやらず涙ぐむ此方に聞居る夫もギックリ折から表にお頼み申しますと音なふ聲ハイと答へて襷を外し取次にとてお鈴は立ぬ

第二回

衣服は着こなし裁縫方と俗諺に云ふ如く其品柄の高下によらず身に適ひ柄に合うて誠に其人の飾り毛と見えば日安からん寒暑を凌ぐに足りなばと云消すは趣きなし又是を以て富貴を示すの看板とするは殊に拙なし其撰み方好みの色銘々が持つた趣味意向を隱さず顯はすものなれば少しは心を用ふるも吉川速雄と聞えしは或る富豪家の次男にてもとの商法學校を卒業せし後米國へ三年ほど留學し同所へ支店を設くるの計畫も調ひよき伴ありて歐羅巴諸國を漫遊し昨年の秋歸朝せしが彼國に在て學者紳士と對話の折り我邦の風俗地理の事など問はれても詳かには答へ兼ね初めて自國の事を疎かにせしを悔い其後は京阪地方へ旅行し家に在りても頻りに學問に凝り元より好の狂文俳諧交はる道も風雅と洒落泥まぬところが一つ持つ本尊樣の光りなり光澤を消したる絹縮紗の西洋服も横濱へ行きわざ〳〵支那人の裁縫職に好みの洗へ金支持に絲紐の目立ぬところに小さなる曲玉管玉を飾りとしたり一人の連は三十一二唐棧の衣服に絹紬の羽織羽二重金巾の裾廻しに摺れて白革の鼻緒は鼠とかはり足袋は皺だけを白く殘して藍に染りたり更に怪むべきは羽織の新しき割には乳、痛みたるなり沈思默考すれば是はこれ夏羽織と兼帶に羽織の紐一本なる爲め彼を着る時は是を外し是を着る時は彼を外す其が爲めに乳のみかく痛みたるならん案ずるに店の手代或ひは

出店の主ならんか深川公園地より木場へ渡す渡しの岸に立止りて速雄は此方を見かへりながら民造此所等は閑靜で宜いナ誰やらが句に「橋臺に菜の花さけり船渡し」と有ッたが此所等の景色だ東京のうちでも此川を越すと別世界だナ、デ御座いますよ、此ごろ藪が大そう開けたと聞たが夫より此の川岸通りを眞直に廻ッて扇橋へ出ると仕よう、夫が宜ございませう、何だか勢ひが無いノ今まで饒舌つゞけて居たくせに急に元氣がなくなッたが如何した最も草臥たのか全體遠足に駒下駄に着流しとは不屆だ、ナニ草臥たのではありません實は落膽したので、落膽した先刻渡しを上るときモヂ〳〵して居たが紙入れでも落したのか、デモ無いので、ハヽア分ッた此間の催しに酷く投げられたのを思ひ出してか一體お前の考へは拵らへ過ぎるからいけない何でも其身を其所へ置いて實情を寫さなくッては人が感じなハ杉風の句だッけ「川の音藪の起臥年くれぬ」としたは此の深川の實情をよく穿ッて有ては無いか、ナール程ネ、氣になるナ此の垣越しの梅や鶯の聲は耳にも目にも入らないか、入りますがネ實は鼻の先へ入ッたものが有るので、何が入ッた、實は少し時間は早いが松本で御神輿が坐るだらうとの腹づもりが違ひ甘い香ひを横に殘して渡しへお出なすッたのでガックリと氣が落ちました此所等には迚も咽喉を通るものが有りますまいと思へば風流は一入寒いものになります、ヤレ意地の穢ない男だ最う少し我慢しろ扇橋からは車と仕ようと打戯ぶれて行く先は梅見の事と知られたり、此方は龜井戸天神の門を入る彼方は境内より出んとする出合がしら吉川君かオ、千本先生是は暫らく、誠に御不沙汰、學校以來昨年御歸朝とは承はッたが、早速拜趨致すべきをと互ひに忙しき應對此の間傍へに立ちしは十六七の束髪沓に踏まるゝ草にもなりたしと願ふ人のさぞ有らん容貌一つか二つ上ぐらゐ小包を持ちしは是また磯かぬお玉といふ下女二人の挨拶濟みしを見て一寸會釋してチョコ〳〵と行過たり民造は跡を見送りながら何と思ッてかチウッと舌打しナント如何です綺麗ではございませんか、左樣サ美しく咲いたナ、串戲ぢやアどざいません梅ではない今の娘サ、大きな聲をするなお梅さんといふ千本の妹だ、此奴は不思議だ時に今大そうな音が響きましたが彼は何です、壁訴訟は止しなよ已も腹が減ッたから彼の小橋を渡ッて直に鹽の辛い鮫で繕ろうと思ッたが前へ一足踏み出す柏子にバタ〳〵と景氣に團扇を鳴らされたのでグット氣になッて通り越した橋本といふのが無いでは無し最少しの我慢だ瓢簞ので補ッて置けば宜い、如才なく疾に補ッて最も雫も有ませんと云へば臥龍梅の事だが此の小村井は周邊が回れるから趣きが有る民造詰め替への瓢簞で大分元氣づいたやうだが杯を下に置いてチト眺めないか左樣飲むばかりなら家に寢て居て御花宜しうを二錢で濟ませた方が宜からう、是は酷い實は花より酒の方ですが又た梅も捨られない風流もよし食氣もよし當時の世界で偏ッては立行きません何でも脫さず嚙り付いて喰取る覺悟アーメンも謠へば南無阿彌とも唱へます、何處までも慾心で押通すとは不埒な心得だお前の樣な者に逢ては梅も泣くだらう、併し私などは少々欲がるといふだけ夫も斯う名乘かけて居ますから不埒も輕いフラチナ鍍金ぐらゐだが世には隨分主人を葛籠の底へ押し込めて自分は密と簞笥の抽引へ手ッ掛ける忠臣もあり迷子を横町へ連れ込んで衣服を剝ぐ道德家もあるから私などは同じ不埒でも情狀を酌量して無罪放免御褒美五圓と宣告に成ッても苦しからず、偖々蟲の好い男だ夫でも親達が育てる時分

第三回

には悪い蟲が有ッて困りますと云たか知らん、能い蟲エヽ能い蟲めといふのが入ッて來ます能娘と聞えませう、聞えるよ聲が大きいから向うへ聞えるオヤ又千本君是から木下川まで夫は御齊發また歸りは向島あたりで御日に掛るで有りませう左樣丁度見ごろでト挨拶濟んで別るれば民造は眼を据ゑて跡を眺め丁度見ごろが怖しい梅が取持つ縁かいナと來て仕舞ッた若旦那否に身づくろひをなさるナ黑い眼で睨みました構はず跡から繰出しませう、コレサ茶代を如何した、ホイ忘れても大事ない事を忘れた御連が能いから五錢と氣ばれアヽ惜しい事だ、時に今のは美しいの、實に美しいの何のと云ッて愛敬がポタ〳〵垂れる杯は常のことドット流れて御住居の町内だけが水撒入費が助かるといふ程だ凄いスワパラシイ樣勢ステキ、是さ人が振り返ッて笑ふではないか慾氣ばかりか柄にない色氣まで加味するとは隨分始末の惡い代物、だ旦那若旦那、何だな異な聲をして、橋本は後日として彼の跡を追ひませう、頗むよお前は機嫌が直ッたが今度は己の方が怪しくなッた怪しいと云へば今一途に居た下女の顏は此間岩田先生から來た幅物の靈照女に似て優しいうちに氣高いところが有る彼の畫工の魚淵といふのは岩田先生の近所に居るとか近年の上手の樣だが餘り世間に知られないのは氣の毒だ何でも古びさへ付けば出來不出來に拘はらず大事がッて年數で價を極めるやうな馬鹿な事が云はれるうちは現在の畫師は立つ瀬がない可なり見識の有る人までが古の字からは從光でもさすやうに有難がるところが異な譯だ自分が產れて今生活して居る此時を何で左樣輕蔑するかお前の口癖ではないが實に分らないオイ歩きながら駄かソレ足元に氣を付けな川へ落ちるよ

第四回

人來と告ぐる鶯も債をはたる前觸れかと聞て首を縮め話しかけた聲も一段低くするとは偖も貧は苦しき者なり左れば皆な此の重圍の中を出んと西に當り東に走り勇を奮ひ力を盡す事なれどよく膝闘を揚るもの少なく鎧に立つ矢は裘毛の如く反ッたる刀を押直しホッと一息吐くほどの手負のみ多し敵が此の大敵に勝つの計略は節儉の二字に在るのみお賴み申しますとの案内にハイと答へて立つ女房が心の中では早や云譯の考へとは氣の毒にもまた憐れなり深見樣は此方でございますかと云つゝキョロ〳〵四邊見廻すは十三ばかりの丁稚なりケゲンな顏をしながら大鯛一尾を魚籠のまゝ差出し是は粗末でございますがとの口上にお鈴は案に相違の悦び是は美事なものをシエ何方樣からと問へば丁稚は倘ほキョロつきへエ神田鍛冶町の吉川から參りましたと云ふに心當りはなけれども深見と尋ねてわざ〳〵と遣物大かた畫のことについての禮か二人のなかへ此の大鯛は過たれど常から夫の好のもの久しぶりで嬉しやと思へば其まゝ請取て斯くと夫に知らすれば魚淵もさし當り覺はなけれども先日表の岩田の周旋にて五月の祝ひに用ふるとて賴まれた鯉の綸の挨拶はまだなければ大かたは夫なるべし近日收入の少なきより魚屋は我前に盤案を下さず呼ばれど用を聞て呉れるは豆腐屋のみなれば骨離れする夫婦の精進是は誠に有難しと其のまゝ請取りて禮を述べさすれば丁稚は何か思案顏見かへり勝に立歸りぬ跡にお鈴はいろ〳〵と貴方の好な此の鯛是を下物に一杯上れ細かな寫しもので御氣が盡きませう今日は最う四時半過ぎ机を片寄せてお仕舞なさい私は一寸鍵屋まで、酒を買に夫は御苦勞ならば久ぶりで庖丁の手際を見せようか

錦魚屋の垣根の際に殼の魚籠を提げし以前の小僧首傾ぶけて獨り言ドウモ怪しい何でも變だ

此間も呉服屋の小僧が下宿屋へ反物を負背ツて行ツて裏から逃げられたゝ新聞に出て居たが油斷をして鯛を棒に振ツては小僧の名折れだ彼様な汚ない家へ何で此様な包み物と立派な魚なんぞを遣るだらう表の岩田さんへなら此間内儀さんが掛ツたから禮は當然だが彼の貧乏に鯛は可笑い珍しいものだから暗雲と禮を云ツて居やアがツたが家間違ひで喰はれては堪らぬ包み物だけは出さずに來たが彼も取返して聞直して來よう左様々々岩田さんの裏で深見といふのではない深見といふ家の表で岩田さんだと云ッたのだらう竄地の悪い番頭だから教へ方が反對だ此奴は大変大事だと顔色かへて取て返し、お頼申しますとせき込んで案内乞へば今鯛を料理せんと錆たる出刃を研に掛りし主人の魚淵が誰君ぞと立出れば丁稚は一生懸命の詞もしどろ誠に相濟みませんが只今の魚は間違ひました何卒お返し下さいましと云れて魚淵は驚きもし怒りもし又面目なくも思ふにぞ物も云はずに鯛を持ち出れば丁稚は手早く魚籠へ押し込みて逃げるが如く立去たり

第五回

跡見送りて魚淵は眼を閉ぢ偖情なし淺猿し我心にも恥かしや貧に饑ても心は饑じと思ひし事もいつしかに淋しくなりて我物ならぬ物を獲たりと棟悅びも夢に等しく覺め來ればよくも尋ねず一旦受けたる大贈さ汚なさは笑ふに堪たる事なりし左るにても女房の歸りていかばかりか打詫んれは樂みを富貴の外に求め書を讀み書を寫せば黄金の屋珊瑚の盃自からにして胸裏に在り窮もまた其分なりと安んずる所あれど世の理もよく知らぬ女の身にては其の憂を何に晴さん不便なり我妻ながら氣の毒なりと獨歎ちの折からに勇みて歸る女房お鈴オヤ其處に何をしてお出なさいます久しく使ふ用がないので庖丁が錆きッて居りましたがお研なさいましたかオヤ鯛を何處へ魚屋が來たので拵へにでもお遣んなすッたの貴方何を立てお出なさる考へ事でも有りますか一杯上ッてからになされば宜いにと云ふ顔眺めて溜息吐きお鈴彼の魚は間違で丁稚が取返しに來て持ッて返ッた、エヽ間違ひアノ門違ひ大でも確かに深見と云ましたに、夫も間違ひ皆な間違ひ惜く思ふは愚擬といふもの、夫だと云ッて折角悅こんだのが口惜い夢のやうな憎い小僧でございますと涙はら〳〵俯向けば魚淵は上を振仰向き左様思ふのも最も至極隣りの寮の催しか面白さうな義太夫節夫は土佐坊是はまた土佐の又平夫ならで同じ繪筆を持つ身の貧苦業は御影の石をも透すと心密かに誇れども世の賞鑒家の眼に上らず人の好みに適せねば跡も微かな燭筆の消ぬ間空なる苦樂より名こそ惜けれよし斯くても知己を後世に待たんものと思ひ上りし我も折れた誠に身後の譽れとて生前一尾の鯛には如ず嗚呼上野淺草の花の雲居ながら遙かに望めども其方は快よく出ても遊ばずかゝる世帶の苦に染みて憂とも泣かぬ心のうち察しられて最惜し併し此まゝのみにも果まじ華さく春を待て呉れと思ひ屈した夫の詞にお鈴はわざと笑顔を作り詰らぬ事で濕りが來ました先達て佛蘭西とやらから山中様の御便りでは大層宜いやうな御噂ホンニ華といへば鉢の梅が三輪ばかり綻びました是を下物に御燗を付けませう綻びたと云へば紅梅町の千本様へ參ッて居る妹から袷を一つ綴ッてと頼まれました彼の御主人も繕はお好で大そう立派な御幅物が有るとのことと夫の好な其道へ話しを外らすも機轉なり、オヽ左様かお玉も最う十九嫁入時では有るけれど此方からでは實家が立派過ぎて能い所へも片付けまい御主人が悪い様にはせぬと仰有るは仕合せ宜しくお頼み申すが能い併し流行らぬ畫師の所へは御斷り申しますと

念を押て置く事さアハヽヽヽと笑ひ辟思はぬ鯛の跳ね込みしより夫婦の胸に浪を立てしもとにかへりて澄む水のいとも靜けき有樣は濁りもなくて安けなり

第六回

醫は意なりと覺え込んで機轉ばかりの御手の筋脈は見るより聞いて察しナルナル矢張時候のお中りでお熱が少々お有りなさるナルナル兎角御養生が肝要でナルナル水藥はお嫌ひナルナル飲みにくいでナルナル宜しい御煎藥を抔とはくらんの藥ははくらん病が買ふ俗諺舊弊な病人は舊弊の醫師を信じまた家業には成り行けど老人ばかりの得意なれば先が見えた追分大津上りにならぬうち分別を仕換んと手前療治に見とめを付けし岩田得庵といふは是までの賢へを纏めて公債證書とし其身は古い馴染の病家だけを病人がなくても遊びながら廻り好から日利の骨董の才取氣樂に泗落た話し好き此の魚淵とは合口にて同人が腕は有れども世に持囃されぬを氣の毒に思ひ何彼につけての信切はさすがに醫者の人柄なり、庭から廻ツていつもゆッたり先生如何と來る人が此日は劇たゞしく表より入り來たりまだ五時半にもなるまいに最うお夜食か偖先生深くお詫申さねばならぬ事が出來致したイヤハヤ申譯もない儀で我輩から平にお詫申すトいふ一件は定て御立腹でござらうが先刻の小僧でイヤハヤとんでもない奴彼の吉川から進物の鯛を何か自分で註釋をつけて取返して持ッて歸ッたとイヤハヤ呆ました定めて御立腹我輩もいくらか關係があり御内方も嘸驚きイヤハヤ恐れ入ッた次第で吉川でも驚いて他の者が直に御詫ながら先日御揮毫の潤筆料と共に彼の鯛を持參しましたが此方へは參りにくいので我輩が代脈と出ました諸事御勘辨を願ひたいイヤハヤ誠にと頭を掻くに魚淵は却ッて氣の毒になり御丁寧な御挨拶で癒み入ります隱さず申せば先刻は驚きました尾頭揃ッた鯛一尾我等が俎板に上ッたは今日が始めて是は飲るわと勢ひよく庖丁を取り上げたところで其物を取上げられ左ながら蔡に擾はれた心地大きに愚癡を並べましたが夫が矢張我等への賜り物とは忝けなし何か味の拔けたやうではござれど手料理を仕れば、我輩も押して御相伴を願ひませうか何にしても例の御心廣くサッと押開いての御詞に愚老も安堵致しました偖御潤筆は持參致しました御請取下さい魚は今持たせてよこしますナニ矢手に庖丁も宜しい承知致しましたナニサ過分ではないサ彼の繪が大層先の氣に入ッたさうで我輩も嬉しい内方も氣を張ッて今日はチト奢り玉へ先生の技倆も追々光采を發して來ますイヤハヤお獨樂の御邪魔を致した然し御料理が出來ましたら一寸御聲をと氣さくに饒舌ッて歸りぎは振り返ッて夫に先生何とも鑑定の下しかねる珍器を得ました置上げの菊の模樣常人の手になッたものとは思はれぬ只今携へて來て先生の御說を伺ひませう是は怪しからん掘出し抔と左樣な野卑な事は致さぬテ只一寸ナ樂しみに買ひ取ました

第七回

蚊を呑むと夢みて母が妊みしと臍の緒に添書が有るか見たし此人加ほれば一座に臭氣を發し仲たる眉も忽ちに皺み花の香みつる團居をば罪重き牢屋の中に在るが如く脈はしむ笑ふ事あるも其笑ひは嘲けりなり悅ぶこと有るも其悅びは人の不幸なりいかなる多くの恨みを此世に持ちて生れけん名さへ鬼島昆山といふ書師文字もなくて文人畫をのたくらせ芋か山か樹か石か分らぬ癡言を書散し人をなやめ紙を費して尙ほ幾許の錢を取らんとする曲者惠みも廣き君が代

の有難さ斯る者も大八洲の外に追ひやり玉はず一つ光りの下に照さるゝぞ冥加なれ年は三十を越えたれど高言亂醉して未だ一家を持たず氣韻俗を離れて世に疎きかと見れば左にあらず卑劣欲深くしてまた色をゝ好む只表面をば作り文人擬ひ八丈のなえばみたる小袖に細の如く綯れたる帶を捲付け當もなく出る友達倒し、コーと是から別に驚かす所も無いナ深見は例の貧印だから襲ツたところが獲物はなし有たところが垣根の傍へ小便をかけて手作りの菜の浸し物ベッ恐れるぞ併し彼所の内儀の妹とか此間來合せて居た女は凄い出來だ此前小鍋の賴みで膳作りした仇英のものに彼の面貌が有ッた左樣いへば彼の時は三日も掛ッて骨を折ッたのに出來が惡いの通用しないのと揑ねてわづか一圓半で追拂ひをッた彼奴は不埒な奴だ越後へ被せに行ッた歸り追剝に逢ッて身ぐるみ奪れたとはよい氣味で有ッた兎も角も御夕飯の刻限となッた無益として魚淵方へ御立寄あらせられよう若し彼の妹が來て居れば夫こそ此方の圖にはまッた事だどうか深見を煙に卷て彼の妹を・・・極ッた家が無いので先づ筆を下すに困難するが其所が働きだ、ヤ、大分深見の笑ひ聲が聞える各來かしらん彼男も貧乏のテレ隱しか何を見ても笑ふ男だが彼所が御日出度しるしで此方の切り込み所だと腹に問ひ腹に答へ垣根の外より勿體らしき咳拂ひエヘン大人御在宅か鬼島昆山でござるヤアお珍しや先づ此方へ幸ひ隣家の方と對酌の折からサア挨拶は跡として一つ上れと差されて此方は心憎く此樣に奢るところを見ると近ごろ景氣が宜いと見える吝生太い奴だと羨む胸を隱してのセヽラ笑ひ是は大分御盛宴でナニ鯉を書いた禮に鯛を貰ツた鯉で鯛を釣るとは御手際な事だ貴公の繪は俗受けが好くて御仕合せだ何でも俗受けの事サ全體風韻だの氣韻だのといふことを貴むは馬鹿な譯で錢にさへなれば盆提灯を書いても差支はない僕などは妙な癖癖が有るで夫が出來ぬ馬鹿な次第サ些と君の御傳習をうけて鯛でも釣る事を心掛けませう兎角俗受けの事だ染物屋の手間取を兼ねなくては共進會へ出しても有名なる審査官方の御意には入らぬ全體他人の評判を待ッて我畫の價を知る抔とは不見識な事だと云ふのが馬鹿の始まりサ御意に入らなくても鯛は釣れないハテ俗受けの事でござると人の好事を嫉み羨やみの塊り不平の破裂丸を投げ出したのでいと面白く興じ居たる二人の醉も醒ける

第八回

失路の人は物を毀つ已れ勉めずして估れざるを怒り掛構へなき他人をも低みに落して恥か腹を愈んとする心中病といふ難治の症日に觸るゝものに非をつけて憚りもなく云放つ我慢無法に逆らはぬ其用心も深見角淵先づ鬼島さんお重ねなさい例に變らぬ君の直言餘り調が高いと俗耳には入らぬたとへ最少し低くなされては如何だ兎角粗放の支那風を帶びて賴まれア紈を羽織の胴裏に用ひて磊落物に構はぬ抔といふ間違が多いが君などは腕が有ッての上ゆゑ人も許すが我輩などでは竈の灰が暖かになりませんハテサ世に賞されぬは仕方がない只何處までも深切に書く事にしたら其うち同臭味の人が出まいとも云れぬ元より畫をかく人々は我樂しみより此業を撰みしにて錢の高を數へて繪具を詆めたわけでもなければ金にならぬとて世を怨む筈はない唯我畫の賞されぬを憾としてます〳〵業を勵むが肝要八十の婆も斯うでは果ぬとやら我等は今も稽古中潤筆に係はらず賴人があれば夫を力にして古人の跡を追ふつもり賴人がなければ盆提灯も手習草紙何をしても恥とは存じません只恥とするのは折角斯の繪の道に志して

其繪が繪として用ひられず徒らに紙や絹を汚す謗りを取る事であります君はまだ我輩より若し今より心を潛めて業を研かれたら金印と共に世の賞賛を博する事は易い事でござらうと云へばいよ〳〵鬼島は喙を尖らせ泡を吹き天下擧ツて盲目なり其の盲目に探られて褒められたとて嬉しくなし我輩は只彼奴等を驚かして一笑とするのみなりと放言するに岩田は驚き長く同席せば喧嘩にもならんと挨拶そこ〳〵立歸れば魚淵も口を閉ぢて相手にならぬにさすが鬼島も平臥てや魚をあらし酒を浴び禮さへ云ず立出る後影を見送ツて彼男も悪い癖だ誰にでも逢へば癖を云ひ書畫會に出れば口論を始めるが夫も業が拙ないからの人笑やみ嗚呼羨やみといふ事も善く用ふれば己れの及ばざるを知りて人の高きに倣はんとする進歩の母卽ち欲羨といふ善きものなれど不平を加味して彼樣なッては此上もない悪いこと他の事より我誡め怖しいは人の心悪魔の宿とも天人の府とも持ちやう次第で變るもの慎しむべしと歎じけり

第九回

朝の雨は塵をしづめ夜の雨は心を淨む同じ降るのもしめやかなる春の夜の雨に遊びに來る友もなくお梅は讀みさしたる新聞を下に置きお玉やそれを仕舞たら早くお出よそして是をお讀み又束髪の事を悪く云た投書が有るよ憎いねマア此の口の悪いことホンニ腹が立つよヤレ格好が悪いの可笑いのと何處までも女は男の玩弄物だと思ツて居るよ自分の見る目さへ美しければ女の迷惑不便利は構はないといふ風だから男は憎いよ動ともすると生意氣と一口に云消して女の身分を底の底へ押し付けて慢かうとは自分勝手な事ではないか學問をしたり便利に就くのが生意氣なら日本中皆な生意氣だよ今まで女といふものは御雛樣の人形と同じだと思ッた目から見ればこそ少し活潑に動く者はオテンバの樣に驚くのだが女も同じ人間と思へば何も不思議は有はしまい今の貴賞の學問をしない昔し者ばかり女を一等下ッた者と蔑視なら其人が道理を知らぬからだと此方で蔑視て相手にはしないが立派な學者が併も洋行もした人が腹の中では男女同等と知りながら自分の都合が悪いものだから矢張東洋の舊習に任せて置いて夫のみならず尤もらしい道理を拵へて自分の風除にする者が有るから憎いよお玉やお前も束髪にお成りよ私と一途の頭つきでも宜いではないかお前は遠慮が過ますよ主從の關係なんといふ事が有りますものか米國などでは雇女は其家族の中に入れて待遇するかまたは客分として取扱ふと云ふよ私はお前とは姉妹と思ツて居るのに禮儀ばかり述て丁寧では氣が置るよ、お嬢さま貴方はお顔にも似合ぬ强いことを仰有いますよ其樣に男は憎い〳〵と御腹を立て御婚禮はどう遊ばす、オヤ否だ婚禮は婚禮何も殘らずの男が憎いといふのではなし私の心に適ッた道理の立ッた眞實の男子を撰みます、マアむづかしい夫なら何樣のが御註文に合ふので有ります、お玉やお前はどんな方を撰むつもりだか先へ最と此方へお出話しが面白くなッたからそして其の急須を取ッておくれお前は私より一つ上だからマアお前はどんな方を撰むつもりだか先へお話し否なら私も話しませんアレ大きな聲だと親父さんに聞えますよ此の向うへ來てお常りよ他人がましくしては否と睦み寄りたる火鉢の傍灰かきならし埋火と共に話しをおこしけり

第十回

撰む、一千八百萬人中より唯一人を撰むなり、求む、源氏平氏華族平民士農工商坊さん神主種々雜多の中より唯一種を拔取るなり、彼か、此か、目移りのする花の枝男女に拘はらずつま定めこそ心づかひにも又樂しきものなれ是を

始めに憤まざれば末の涙は拂ふとも乾かじ一期の浮沈半生の苦樂此の一擧に定まるなれば各々撰む處を詳かにせざるべからず女同士の馴れ睦み火鉢を中に取り卷いてお梅はお玉の顏を眺め宜いではないか誰も聞はしまいし思ふだけを話しておしまひ、夫なら申しますが私は學問の深い見識の高い人は否ですよ何でも信切な人が宜うございます先日馬車で入らしッた河隈樣は御立派な方ですが眼が見はッてキットした御顏付惡ッとらしくッて眞向には見られないほどでした亦定めて奥樣が何かお話しをなさッても女童の知ッた事ではないと睨み付けてお傅舞ひなさいませう怖いの氣味が惡いのと云ふやうでは身柄はどんなに上ッても嬉しくないと思ひます彼樣に立派な顏を拵へて窮屈がるのは苦い物ばかり食べて生れたので有ませうか、オヤお前は夫では何時でもゲタ〳〵笑ッて取しめのない鎌田さんの樣なのが宜いの否だ私は彼樣な饒舌で顏に絡りのない議論に極りのない人は嫌ひサ、誰も鎌田さんが宜とは申しません貴方は竹東さんのやうな强情なムッツリがお好、彼樣な和暴な人は嫌ひこれを花にたとへて云へば梅の苔の寒さにめげず今馨を放さうと覬としたが好き、私は麗かな風に誘はれ蝶が舞ふかと思ふやうに花片の散る時分が眺めと思ひます梅と申せば先日梅見に御供をしましたとき旦那樣の御友達とかで天神樣で御目に掛ッた方は御年頃と云ひ御樣子と云ひ貴方によい御人柄と存じました、アヽ彼方は吉川さんと仰有ッて學問もあり洋行もなすッたとやら立派な方で有るけれども一寸お見掛け申したところが樣子の宜い意氣な方だから……樣子の宜い意氣な方跡のだ。だからが分りませんネ、デモ彼樣な洒落た方は多く移り氣なもので女を器物と同じに玩弄ぶから否よ、勿體ない彼方でもまだ御氣に適ひませんのマア

第十一回

債方は借方より記憶强しとはいへど又借方は貸方より逃げること早し深見を立出たる鬼島昆山は衛へ楊枝の獨り言ドウモ奴も詐せぬ彼所に居合せた藪醫者めも氣に喰はぬ奴だ何だ業を勵め己を繪師と心得て居るか跡を世に晦してしばらく繪に隱れて居るのを知らぬか豆のやうな眼孔で己の眞面目が見えるものか馬鹿な事だ併し左樣は云ふものの實は窮したごまかし付た蘭竹では迚も世は渡れず急に眞面目なものも書ず共進會の美徳會のと見せ物ばかり殖るので人の眼が肥えて壓が利かずやッて見たところが細かな物では工手間が掛ッて其割には彼奴等が渡しをらず遊歴と出かけたいにも田舍者が利口になッて滅多に屏風や襖は汚させて呉れず遊歴者物貰ひ等入るべからず抔と村口に癖に障る棒杭を建てた舊弊と演說者招待に奔走するお先者と何方にしても此方の懷中には重みを付けず熱海あたりの湯治場では大分文事に託せて賭事が流行るといふが是も餘り器用には出來ず書畫會を催さうにも是まで出さぬゆゑ奇はしまい池の端の家でも少し飽氣味で待遇が惡し據所ないから國へ歸るとしようか夫にしてもせめて褒狀にでも有付いて行かねば餘り氣が利ぬ此前の出品も甘くごまかし課せるところをアノ何めが是は斯うした原圖が有ると尻を破ッたので掃出された彼奴憎い奴だ斯う此節の樣に實地の腕鏡べが有ッては迚も協はぬ出して赤恥を掻くより例の通り罵り倒して出さぬ方が奥が知なくて都合が能い、ヤ、都合の惡い所で善助に出合ッたが是から山へも逃上がれぬよし先ずれば人を制すで此方から詞を掛て驚かして追拂はうオイ大人善助先生何方へお出だナ、根岸へ宜では無いか左樣稼いだら置所がなからう僕の例物かあれは近日イエサ間違なし近日返濟するよ確かな

當が有るのだ當があればこそ斯うして機嫌で居るのサ惜しい事で有ッた今新坂の伊香保で馳走になッて大廣間へ掛ける見付の宜い物を急に書けと彼處の主に頼まれた外なら斷るのだが舊來の馴染ゆゑ能はと引受けたのでまた看を替へて飲ませられた貴公が來ると腹を痛めずに馳走をしたもの最う一漏歸るも可笑い三橋際の牛店は如何だ突き合ふなら奢るよイヽサ屹度確かな返濟の當が有るよ宜しい承知したエーイ馬鹿め眞に受けて例の愚癡も並べずに御辭儀をして行きをッた併し彼口へも如何かしてやらねば氣の毒だと云ッて如何にもならぬ此方も氣の毒確かな當といふのは貴樣が頓死するより外には無のだ金錢などの事に頓着する鬼島昆山ではないぞ馬鹿々々しい

第十二回

晴れたる空も宵月の西へ落ちたる跡暗く晃めく星は川水へうつりて砂子を蒔たる如し黑く高きは待乳山遠く白きは不夜城と空にもしるき吉原なり薄ぎ行く船の纜の音と風の傳ふる騷ぎ唄蘆の若芽に堰の水かゝる寂しさ靜かさも使ひの道のいたく後れて一人淋しき隅田堤後を振向きまた前を三圍前に立止り今日が暮れたばかりなのに何だか急に夜が更けたやうなエヽ氣味の惡い早く暇を申せばよかッた櫻の時分は賑かで押し返されぬ人の出も花のない頃の暗の夜は此の通りの淋しさ同じ堤の草も木も人の心は頼まれぬと定めて笑ふことで有らアヽ花は僅時の跳めだのにと獨り言ちつゝ右の手の包みを左に持ち替へて急ぐ向うへ酒臭き汚き男が立塞がり姉さん淋しからう送ッて上げよう遠慮をしなさんなどうせ吾妻橋まで歸るのだ否でも送るよ其の包みも持ッて行ッてやらうと出す手を拂ひキットして昔しと違ふ今の夜道淋しい事は有りません御深切は有難いが送ッて呉れずと一人で行きますと云放して歩みかゝる袖を掴んで何だ此奴が折角送ッてやらうといふのに否なら否で宜い異に云廻して難癖を付けやアがるサア一途に屯へ來いと取つく男を突倒し逃げんとすればまた取つく折から來かゝる一人の男が物取なりと見るよりして走りかゝッて酔漢の領上取ッて後ろへ引けば女は前へ二足三足倒れんとして足を止め誰君でございますか有難う存じますと腰を屈めて手を合す顔は夫れとは見えねども物腰もいとしとやかにて斯る折にも詞の落ち着き、禮には及ばぬ氣を付けて早くお出なさい此奴めまだ懲りぬかと摑みかゝる酔漢を身をかはして腰を突けば土手から下へ轉げ落ち溝へ陷りて蠢めく樣子すかし見れども下暗し強て捕へても手柄にならず誠の物取でもあるまいから此まゝ許すも仔細はなからう今の女は何所でやらと首傾ぶけて立去りけり

第十三回

隔てぬ友の樂しさは隱す事さへ打明けて夢を話しに畫き出す住田亮といふ官員吉川とは學友の中にても心合ひなれば座敷へ通るも案内なし吉川は今女文字の手紙を讀み居たりしが相變らず御勉强カネといふ聲を聞て劇しく其手紙を卷きて本の間へ挾み住田君か近々何所へか御出張のやうな噂を聞いたがいよ〳〵出かける積りか所に依ッては僕も行だけ御一途に參ッても宜いがと云ひつゝ反古にて火鉢の端を拭き住田の前へ押し遣ればギコハな手にて煙草を捲きながら行かぬ積りサ夫より此方に居て二三年また學校生徒になる積りだと話す間も途切れ途切れ吉川君君は器用だから此樣な事は手綺麗にやるだらうが僕には出來ない膝の廻りが煙草だらけだ牧田は上手に捲く話しをしながら左の手ばかりで一寸捲くが彼は餘ほど妙だ何でも左樣だが其人の性質に有る事で勉强して至

るといふは難い話しだ千本などは何時習ッたか字をよく書く彼では書家でも世が渡れるだらう僕は其處へ來ては手細工は閉口サ、手細工はといふは。の字はもの誤りか何も別段君の長技として承はッた事はないやうだ、まだ茶も出さんで惡口を始めるよ能く煙草を上手に捲たら何の益が有ると云出さなかッた夫は左樣と今本の間へ隱した假名の會の建白書のやうな手紙は何だ賢人顔をして僕などを叱るが怪しいぞ怪しいぞ、君のやうに兩つの眼が猥褻の雲に掩はれては何を見ても其の感じが起るが彼は何サ、何だ、靜岡に居る伯母の手紙サ、澄したものだ今顯はれるまで知らぬ顔とは恐しい外交政略だしかし伯母さんの手紙にしては字が大き過ぎる容易ならぬ國事犯の嫌疑サア見せた〳〵、五月蠅男だ跡で見せるが何故君は出張を嫌ふのだ萬卷の書を讀みて千里の道を行とは詩や文章を作るばかりの話しではない處世の要務を學ぶには旅をするに如くことはない今に家累が出來て思ふとも實行するは難い獨りのうちに驅け歩いて見る事サ僕も今年は松島見物といふ目的を立て奥州の方へ行ッて見るつもり君の出張先も彼方の見當と聞いたが、所が出張を見合せるに仔細が有る是れは漸やく僕の了簡の中で固まッたばかりで未だ手酷い攻擊を受けると崩れて仕舞かも知れぬが話して見よう五六日前の事で有ッた例れの通り出勤がけ萬世橋から右へ切れるトタン洋裝の婦人が一寸會釋するからハテナと振り返れば千本の妹よオヤと聲を掛けようと思ふうち心なき車夫の五助めが喧雲と驅けたので帽子を取ッて挨拶もせぬ失禮それが氣になッてとう〳〵先づ出張の内意を願ひ下げた、ハテ大層禮儀正しい人になッた學校時代には人の菜まで切り込んで履物は自分ばかり共同主義を唱へた者が帽子を取らぬだけが夫ほど氣になるとは天晴さすがは交際家煙草の捲方も演習する譯だ、夫だけの解釋かハテナ學校時代には眼光紙背に透ると云れた君で有ッたが天晴さすがは商法家儲け一方に凝り固まッて外の話しには感覺が薄い所が有難い、薄いといふのは忌詞といふ次第か早く左樣云へば宜いに遠廻しに云ふから此方も少し意地が曲る、誤ッたお察しの通り所で君を崇めて月下氷人結ぶの神と齊祀る次第サ、有難い氏子の方から御託宣善哉々〳〵一骨折りませう夫れに千本も君を信用して居るから是は整ひませう成程彼の妹御は柔和さうだ左樣いふ譯なら明日にも千本へ出かけませうと話しのうちに酒肴が出て歡を盡して歸りけり

第十四回

紅梅町の千本と聞えしは或藩にて有力の家柄父は一時高き司に上りしが若き人々が劇しき詞の中に揉まれなか〳〵堪へ得べきに非ず斯に戀々として後進の望を閉づるより早く退ぞいて道を開けるに如ずと元より貧産饒なれば其所に心の引かるゝ事なく仕を廢して或る會社の顧問となり手を後に組みて倅が前途を眺むるのみ倅芳郎も會社員となりやゝ糸篇に申の仲間見ること聞くこと花美なれば妹お梅も今を春べと咲くや此花馨りゆかしと下陰に立寄らんことを願ふ者あれどお梅は顔のやさしきに似ず心は兄にも立越えて雄々しく東洋婦女子の卑屈なるを慨き自ら卒先して此の弊風を去らんと期し音樂裁縫等の事は身を入れず高尚なる學問に心を委ね其身と同じき男子に合體して素志を果さんとする望みあり左れどまた情といふ軟かき風に吹かるゝことなきにしも非ず心に思ふいろ〳〵を心で叱り窘めて人は見ねども我が顔を書物で掩ふ折もあるべし吉川は身に副はぬ役目なれど親友の頼み否とも云へず或日の午後五時ごろ此門前に車を止め案内乞うて名刺を出せば取次の

者より先へ芳郎は立ち出でよくこそ來玉ひし先づ此方へ幸ひ只今歸りしところ偖其後は先日はと互の挨拶時ありて吉川は用事を云出んとせしが他人の事なれど恥らひて何となく云出し兼ねまた雑談に間を繫ぎぬお梅は吉川が來りしと聞き出て挨拶したけれど胸の鏡に面影の殘りて消えぬ意中の人はしなく出んも用意なき者とや云はれん生憎今日はお玉も居ず付端なければ間を隔てて他の腰元に茶の事などを差圖して不圖聞耳を引立れば話しのうちに我名が出づるに思はず胸に浪を打ち平生の氣性は俄かに失せて仔細を聞かんと襖際身を縮めてぞ居たりける吉川は幾度か云んとして云も切らず額へ手を加へて詞の調子もいと低く何事か話せし末、是非妻君に貰ひ受けたしといふばかりが立付よき襖を越して聞えたればお梅はいとゞ面ほてりして心の糸は亂れたり

第十五回

ヤ女權伸張論者は此所にお出か 先刻お玉と一途に出かけたかと思ッた、兄さんの串戲ばッかり 私は學校から直歸りましてお玉を毛絲を取りにやりました今お歸りになッたは先日龜井戸で御目に掛ッた、オヽ吉川君サお前がお出なら一寸挨拶をすれば宜かッた夫に付てお前に話す事が有るが 例の伸張論は後にしてお呉れ、兄さんまで 私の云ふことを馬鹿になすッて何處までも女は劣等の者と輕蔑して、マアサ宜い輕蔑はしない併しお前の議論の鉾先も幾分か鈍らねばならぬ時節となッたと兄の詞にお梅は推し偖はいよ〳〵彼人より我身へ婚儀の話しありしか彼人とても文明の新思想を貯へたる方なれば婦女を奴隷の如くせらるゝ事は有るまじけれど又同等のことに熱心とも見えず寄らず障らずといふ事は一種の輕蔑にて共に談るに足らずとする心より起るなれば其點は誠に頼もしからねど左れど風采と云ひ擧動と云ひ學問は兄上も感服なさるほどなれば最好ましき緣組なり迚も我心と同じ心の人を求むるとも得られずば彼方にこそ身を任さめ愚者に尊まれんよりは寧ろ賢き人に壓せられんといふ俗諺もあるものをと脆くも情に負けんとして其の云譯さへ作りしが俄かにまた常の心に復り否々わづかに愛慕の雲にくらまされて平生持ちし精神を失ふべくも非ず我身まだ其人を撰ぶに遲き年にあらず嗚呼危ふし此身を戀の犧牲とせんとせし事よと雄々しき心を振り起せば胸の動氣も收まりて何やら氣になるお詞どんなお話しでございますと兄の居間の緣側の方に坐し悟られぬよう息を吐きぬ千本は膝の廻りを探りて煙管を取り此話しは親父さんがお歸りの上と思ッたがお前の心を聞てからと夫で呼んだのだが今吉川が來たのはお前の事でと云かけて詞が途切れたれば偖こそとお梅はまた更に動氣がするを顏の色にも現さじと念じて堪へる苦しさは夕ぐれ方の薄暗きをわづかに斯となしたりけり千本は詞の跡を繼ぎお前が毎度磊落で面白い人だといふ小石川の住田が是非お前を妻君に貰ひたいと吉川を以ての云込みだがお前の心は如何かまた串戲と云れるも知れぬが隨分住田はお前の薫陶で一かどの女權保護家と成る男だと云れてお梅は算用違ひしばし詞に當惑しさし俯向くに夫と察し可否の返事は今急な事ではない先づ話しだけして置きます最う親父さんもお歸り後に緩くりお玉も歸ッて來た樣子だと兄の詞をよき機會に立上りながら心の中には五月蠅世の定めや尼ともなりて獨り過さんと何やら失望の有樣なり

第十六回

女の奉公も口多し華族方の奥向きに仕へまゐらせ薔薇の香馨るお姫樣の御傍にありて遊び事の相手に永き日を笑ひ暮すもあれば御新規さんロ

ースで一合と叫びながら重きを擔ぎて階子段を昇り降し短かき夜を更くるまで働くもあり或ひは太き井戸綱に搦まり氷を碎きて米を精げまたは新道の格子作りに看守の役を兼るもあり精勤功現はれて商家の後妻に擧げられ相思緣熟して馬丁の女房に果るもあり雇人受宿もとより誰彼に依怙なく雇ふ者雇はるゝ者また始めより相識る者ばかりに限らず其身々々の廻り合せ善きも惡きも働きぶりと深切の心一つなり千本の召仕ひお玉といふは父は三州吉田の藩士にて祿輕けれど義は重く昔しづくりの巖疊なりしも六七年前頓死して跡には使る者もなく深見へ嫁したる姉の許へ來て一二年世話になり十五の年より五年ごし此の家へ雇はれて娘お梅とは姉妹も同じ陰み學問稽古の傍に置かれて習はぬ事も聞覺え元より賢しき者なれば却ッてお梅より學識は立優りて有れど愼しみ深く何事も內端にて貧しく育ちたれば望みは淺くたゞ快活に世を送る人に伴はれて良全の妻慈愛の母とならば足れりと思へり左れどもまた心の一部分を情といふものの宿にかしたる以上は幻しの影のいろ〳〵を空中に畫くことなきにしも非ず吉川速雄の姿形を見しよりお孃樣には似合の御方嗚呼私も其身であッたならと想ふが胸に疊まりて及ばぬ事とは知りながらも忘られず先日の品定めにお梅が其人を大切に思はぬと云ひしよりいよ〳〵其身の繼は募れど家さへ有らぬ此身にて斯る方に願ひを掛るは我ながら榮耀らしいと叱ッて僅に堪へけり今日は主人の云付にて日本橋邊まで編物に使ふ毛絲を買ひに來り立歸らんとする本町通りにて上野の方より來る鐵道馬車淺草の方より來ると二輛續けさまに來りしに耄祿頭巾を冠りし田舍者が穀車を曳きてグヅグヅと來る其間へ日本橋の方より矢の如くに走せ來る人力車アレ危なやと思ふうち十二三の小僧を供にしたる五十餘りの女が避けんとして東側の軌軌に躓づき倒るゝにお玉は我知らず力を出して田舍者の車を突きやり老女の手を取ッて引立る此の時早く人力車は走せ拔け鐵道馬車も驅け過たり老女は慌てながら片脇に寄り偖も危ないところ貴君のお蔭で助りましたが貴女の右の手の御怪我は と云れてお玉は始めて心付き見れば車を推しやるとき輪で摺り剝きしか血が出て痛も强きに驚ろきしが手拭にて其處を押へイエ何ともございませんホンニ危ない事でござりましたと一寸會釋して別れんするを老女は引止め此處で怪我がございますと私の身より倅の心配また名前にも拘はりますに貴女のお蔭で助かりましたゆゑ此禮を申したうございます私の宅は最うわづか彼方へお歸りなれば尙なのこと是非お立寄り下さいまし、何のお禮に及びませう主人の使で急ぎますゆゑ、デモ御座いませうが是非に平に直銀冶町でございますから、夫なら御近所まで御一途にと心を破らず連れ立てば老女は悅びサア爰が手前の宅見苦しくとも先づ奧へ、イエ〳〵是でお暇と押問答の折から立歸る倅の速雄母は見るよりオ、よい所へ歸ッた今本町の通りで車に敗れる所を此の御方に助けられましたよく御禮を申して、オ、お前さんは、貴方は、たしか千本さんの、ハイ召仕ひの玉と申します、マアお上り下さい、イエ使の道でございますからと俄かに顏を赤くして逃ぐるが如く馳せ行けり

第十七回

子は三界の首械とは惡い方の奧を云ひし俗諺子に增す寶世にあらめやとは善い方の上なし歌首械なりとて出來るものを防ぐもならず上なき寶といへど求めて作らるべくもなし荷と思へば荷寶とすれば寶それは作りし上の育て柄により て差別はあるなり千本の父は男の子は其身にも優り賢く心術我恥かしきまで正しく且つ健か

なり娘はまた姿形うるはしきのみか心ざまも雄々しく花の盛りの年にまで達したり二人揃うての孝行に何足らぬ事はなし只人知らず涙の催さるゝ事は斯くまで子供等の立派に成長せしを見果ずに先に身沒りし妻の今あらば如何にとの思ひやりなり是ほどの不足は誰が身にもあらんと自ら慰むれば其他の事は皆な打笑まるゝ事のみなるは目出たし今しも玉とも花とも見る二人の子等を我前に呼び火箸を灰に固くさして夫に雙の手を掛けて二人の顏をいと悅ばしげに打眺めいよ〳〵お梅の婚禮話しの蓋が開きましたナ實は疾から其事は思ッて居たが何事もお前に任せて私はホンの傍觀の助言お梅も世間の娘子供よりは立優ッた氣性なれば心配する筋の事はなし我が夫を自身に撰むだけの見識は有ると思へば結句世話をやくよりもと口出しをせずに居ました如何せ此の一二年に極めねばならぬ事ゆゑお梅もよく考へるが宜い併し今の話しの住田氏は如何やら氣に入らぬ顏付だが外に誰ぞ目的は有るか私の考へでは久しぶりで先日見えられた吉川氏が至極似合と思ッたがと云ひかけて娘の顏を見しがまた急に倅の方を向きて詞を繼ぎ其人が今度の口入れでは住田さんは止して貴方に致しませうとも云れぬ義理また吉川氏も承知も成りにくい譯だが芳郎お前は何と思ふ、左樣幾許妹が伸張論を私に立付けてもさすがに此事に付ては例のやうに議論もされますまい住田はチト輕薄といふ難は有りませうが彼は見たところフハ〳〵して居ますが内心はなか〳〵固い男交際も上手なり學問も遂げた事はありますまいが何へでも博く渉ッて居ります妹とは反對な性質だけ却ッて善いかと思ひます吉川は私も最初に夫とは思ひましたが業に似合はぬ哲學家で細かく氣が付いて云へば妹とは同性質ゆゑ始めは兎もあれ終始の爲は如何ありませうか人物は上かも知れませんが實地役に立は住田でございませう私は住田なら宜いと思ひます、兄さんの御鑑定通りでございませう併し如何やら私は考へが決しません、夫なら先づ二三度逢ッてよく氣質を糺したうへとしたら如何だ吉川も媒妁人となる譯ではない只話しの申次だけだから妹御が住田と直接の交際をなして下さるまでに至れば使命は果したといふものだと云て歸ッたから、夫ではアノ、左樣としろ左樣としろ

第十八回

一筆しめしまゐらせい其後は御變りもなく御勤めなされいか追々春めきいにつき例の齒のいたみは如何にやと御案じすい先だッて御賴みの衣類誠に〳〵不手際にいへども仕立上げいゆゑ持たせさし上い綿は薄くとの事にはいへどもまだ餘寒も去りやらぬ程の事なれば肌寒くなきやうと能いのを撰み チト多く入れすい我家に居ると違ひ俄かに寒しとて心のままに重着をなさる事もなるまじく無理に堪へて寒氣にてもお引込みなされては と心づかひ致しい〳〵も御身大切に御勤めなさるべくい來月十四日は母上の七年忌何とぞ二人うち揃うて御參り致したくい御存じの如く宿にても心に任せぬ事ばかりにいところ先切お話しすいふらんすへ送りい給大そうあちらの人の氣に入りいよしにて其御方此ほどお歸りにて多分の悅び下され誠に〳〵嬉しく定めてそもじ樣も御悅びの事と存じいそれゆゑ夫も元氣よく跡註文の繪を毎日々々精出し居られ傍にて私もいかほどか嬉しく嬉しく氣も引立すい近々に其御方の御世話にて池の端とやらへ引移る都合にもなるべくやとのこと少しは住居なども

綺麗になりいへばそもじ様の栄にもなるべくい其の御方とゆすはそもじも御存じの黒門町の山中様にいそゆゑ來月の年回には夫も一途に參るべくとゆされ樂しみ居りい私一寸まゐりて御目もじのうへ御話しゆしたくいへどもそれゆゑ隙なく使に頼み文にてゆ上いきゝ

尚〳〵仕立あまりのきれは此方に取り置きゆい古き襟はお貰ひゆし洗うて私のにかけい

駿河臺紅梅町　千本さまにて　入谷村　おたま様　姉より

御手紙拝しまゐらせ久々にて姉上様に御目に掛りいやうにて嬉しく有難く存じい御いそがしの中をも憚からずいつも我儘の願のみ御叱りもなくわざ〳〵御届け下されしんよ〳〵御禮ゆ上い夢のやうに過ぎい月日もはや七年とや母さまの御年回には是非此の御仕立下されいを着て參るべしと今より其日をかぞへ居りい何より結構なる御便りは兄上様の御出世我身の事より嬉しがりまゐらせい定めて姉上様にもいかばかりの御悦び尚ほ此上によき御出世を祈り上げまゐらせい爰許御嬢様も御目出度御話しにて何や角や賑はひ一寸姉様兄上様の御機嫌を伺ひたしと存じながら參りかねい私も少し御話しゆたき事御座いがいづれ御目もじの上と書殘しまゐらせいしかし御心配の事にてはなくい此事兄さまへは先づ御話しなく願い御たづね下されい齒のいたみは今年は忘れいやうにて嬉しく是も姉上様御いつくしみの餘光と有難く存じまゐらせい急ぎいまゝ廻らぬ筆の尚さらなれば宜しく御推もじ願上いきゝ

此の御菓子只今御奥よりいたゞきゆい餘り見事ゆゑ御返事に添へてさし上まゐらせい

姉上様まゐる　たまより

第十九回

神田鍛冶町の吉川の母は先ごろ室町通りにて車に敷かれんとせし驚きよりか心地例ならず飲食平生の半ばにも及ねば孝心深き速雄は日夜看病怠たらず其身も痩せるばかりなり今日も外の用の次手風月堂にて菓子を求て歸り母親さん如何でございます何か上りましたかソップが幾ら滋養になるとて夫ばかり上ツて力が付きますものか此間民造が持ツて來た蕎麥饅頭が宜いと仰有ツたから取て來ましたナニ喰りませんマア御覽なさい肌が綺麗で甘さうだお先へ一つやりますお竹私に茶をお呉れ母親さんどうでございますと喰べて見せるも母の食氣を催させんの心遣ひ夫と察して笑顔を作り其様に心配してお呉れでない只少し胸が痛いばかり夫も絶えず痛みはせず喰物は平生とて此のくらゐなもの今も新聞を讀ませて聞いて居ました併し私の榮耀に云ふのではないが斯ういふ時にお前のやうな優しい氣性の嫁が居たら尚さら樂で有らうと思ひます私の都合でお前の了簡を枉ても悪いが何處へも出ずに退屈まぎれ其様な事ばかり思ひますと嬉しき話しも老のくせしみ〴〵として涙ぐめば速雄は大いに打笑ひ母親さん夫だから頻りに私も探して居りますが目うつりがして極めが付きません寧そ貴方が御見立なすツて下さい曩日私が母親さんの代りに臺所へ出て魚常が來たときグット通のつもりで手鉤で比目魚を引かけると旦那とんだ所へ疵をお付けなさる魚は斯うして此處へ打込むものですと講釋を聞いたうへ柔かいのを押付られましたどうでも目

利は母親さんが御上手だと戯れるに元氣よくお前とした事がいかな事でも魚と嫁とは一途になりません私が貰ふお嫁では有るまいしお前が貰ふのだからお前が目利をするが宜い買被りの無いやうにオホヽヽホと打笑へば速雄は眞面目に頭を搔き其の買被りが恐しい衣類や道具なら諸方當ツて見て直を極るといふ事も有りますが是ばかりは一寸本直が分りません柔和て無口と見えるが馴れて見ると存外ハネで饒舌で有ツたり束髪で編物稽古が獨りの時は針をなくして呪ひの歌を詠むから見かけばかりでは踏込んで直が付けられません併し身分の低い者は其の付加への飾りをして居られないから自然と天眞が顯はれます夫に妨終感謝の心持が有ツて宜からうと思ひます世の中に一種何でも惡く云ふ質の者があツて今居ない昔の人や面と向ツて辯駁の出來ない人までを恨もないに惡く云ふのが有ツて聞くが否でございます其樣な者は果は天氣の晴陰まで一人の便利の爲に褒貶致します何でも有難いといふ氣のある者をと心掛けます、其の詞ではお前もまた掛かまひの無い人を惡く云ふやうだ串戲は措いて私も左樣思ひますお前の氣に入るか入らないか實は心當りが私に一人有ります、母親さんの御意に入るか入らないか實は私にも心當りが一人ございます。

第二十回

櫻が美しと云へば木瓜が面白しと云ひ沈香に寺臭いと鼻を摘む者あれば石炭の臭で食が進むと悅ぶあり痩たを意氣と褒めれば肥ッたを愛くろしいと賞す心々の別ちあれば萬人同好といふ事は難し難いところに妙味あり吉川速雄は千本の侍女お玉を一日見しより何となく其容貌心に忘れず一二度同家へ行きたる折り見かけたれど未だ詞は交さずたゞ其の擧動を窺ふに迫らず緩かならず愛敬ありて物つゝましき樣子なれば斯る婦人なれば總て家内の事を託しても過ちあらじとまで思ひたるは我母をいたはり吳れたる折の話しに深切の程も知られぬいでや其禮も述べ千本にもよく平生を聞き親許を尋ねて差支なくば妻にせんと早速千本へ行きて知り合の中なれば心のうちを隱さず話せば千本は悅び左樣なれば彼の仕合は妹にも增したり彼の親許は云々にて彼の氣質は斯樣斯樣學問は口に出して人に示さねど生中の學生は爪を喰ふなるべし親許が不都合と思召さば拙者方より諸事見にくからず取計らふべしと云ふに否夫までの御配慮にては痛み入る餘所ながら當人の存意をお聞き置き下されいづれ其うち參上せんと賴みて歸りし後母の病氣に脫れがたき用事の外は家を明けねばしばらく千本へも行かざりしが今母との話しに付き此事を云んと思ひしが先づ母の了簡よりと問へば母は悅ばしさに膝を進め私の嫁に欲しいと思ふは外では無い此間事に敗れようとしたとき救ツて吳れた千本樣の腰元名はお前に聞てお玉と知ツたが親許は何所か何者か知らぬ夫を紛して不都合なくば彼娘が可愛いと思ひます斯う云ッたからとて屹度夫がと云ふのではない私の思ふ所は斯うだがお前の考へはと割符を合せたやうな詞に速雄は少し面を赤め是は不思議私も實はそれで、オヽお前も彼娘が宜いと思ふか夫こそ緣の有るといふもの少しも早く併しお前が自身では何ぼ構はぬ心でも異なものでは有らうから民造に云せたが宜からう、先づ千本の詞を聞て其上で親許への掛合は民造に託すと致しませうと母子睦ましく相談を極めて夫なら是から千本へ行ッて參りますと速雄が立出たる跡にて母ははやお玉を迎へ取りし如く悅び奉公するほどなれば支度も整ふまい彼の小袖を直して着せませう彼の帶もやりませう昔し物だから氣に入るか如何だか頭の物も讓りませうお竹や暦を一寸イヽエ夫ではない正眞の本

になッた暦オヽそれ〳〵と眼鏡を掛て病も忘れいそ〳〵するも倅の可愛さ親の心ほど世に有難きものはあらじ

第二十一回

同じ使にても吉事と凶事とにては骨折の生死あり借金の催促などは我物にもならぬに借人の否な顔を見て理窟の出やうに依ッては立ずともの腹も立ち怖らしい眼付もせねばならず知らぬうちに我が相好も悪くならん夫にはかはりて民造は日出たき中の目出たき婚姻の掛合も下話しは千本方より屆いてホンの表向の使の役目只氣を詰らす一事は萬一不縁起な無益口が我が咽喉より出づるも知れじ自分と嗜んでも平生の饒舌不用意にヒョイと出ては大失策身で身の取締りが自由にならぬ斯ういふ時には咽喉佛峠に巡査派出所を設けたいものだと我手で口を押へ池の端の深見へ來り聲づくろひして私は神田鍛冶町の吉川より出ましたがと云入れヽば深見にても兼て期したる日出度話千本よりもお玉からも悉く聞き今日使が來るといふ事も薄々知て有れば其處は端近まづ〳〵二階へ階子段が急でございますと丁寧のあしらひ二階の座敷の唐紙際へイエ是で宜しうございますとヘタクタ辭儀をして陣取つて動かず魚淵は出來りて先づ彼へと云へど身を固めて隅へ寄るゆゑ據ろなく上座へ着き初對面の挨拶終れば爰ぞ晴がましき場所なりと偖今日上りましたは兼て紅梅町様から御沙汰もござりましたか御妹御を手前主人の妻女に申し受けたく御相談に上りましたと何十遍か道々繰り返して來た短かい口上を述れば夫は冥加に餘りました儀何はしかれ麁酒一つと用意せし饗應に民造は役目をしまうての後なれば安心して數杯傾けイヤ斯様申すと何か仲人口で申すやうなれど手前主人は若いに似合はぬ篤實にて兼て書畫器物などを愛しますれば定めて貴方とも御話しが合ふことで老母もまた至ッて情け深い者で定めて妹御を大事がります事で前の事でござりました仲働きに置きました女が下り際に涙を流し隨分私諸方渡り歩きも少し主人が叱言でも云ふといよ〳〵胸氣になッて麁相のやうな顔で大切な品など打破て腹愈せを致したものですが此方へ參ッてから一度も暴いお聲を頂かず先度御親類から硝子の湯沸しが參ッたとき私が仕舞はうとして取落しハット當惑の心の中では定めて嚴しいお叱りと思ふに違ッて御隠居様は御腹立の顔もなくオヽ危ない怪我をせぬやうに碎を集めて捨てた斯ういふ毀れ易い品は毀れて仕舞ふまでは氣遣の物だと仰有ッたばかり生れて始めて眞實に麁相をしたと御詫び申し夫が骨に染みて物事が丁寧になッたは有難いと朋輩に話しました中々渡り者の下女などが心から降參するものでは有ませんが此の一事でも御推察と身振をまぜて饒舌しが下女といふ詞は緣女へ差合此奴は一番出損ひウカ〳〵此の上何を込み上げるかも知れぬ襤褸を出さぬうちも歸らんと心づいて俄かに暇を告げいづれ取交せの日取等は近日打合せ致すべしとヒョロ〳〵として深見方を立ち出でアヽ能い心持に醉つた燈のついたのをチッとも氣が付かなんだ眞黒な上野の景色もまた能いわエおッと危ない石に躓づいて此の流れへ落ちては大變ハテナ是は不思議だ紙入がないオヤ袂にもなし若し今の家へ置いて來たか知らん紙入はございませんかと歸れもせず彼處に殘してあれば屆けて呉れるだらうイヤ左様は云て居られぬ彼中には地代の集めが十八圓餘コリヤ大變餘り目出たくないぞと醉も興も醒果て深見方へ取て返しぬ

第二十二回

白き富士を黒く殘して西の空の雲の色紫色に輝くと見るうちやヽ色濃くなりまさりて終に富

土が根も空の色も同じになれば谷中上野の森へ歸る鳥も影を不忍の池に止めず家々の火の影星なき夜にも照りて宛ども油繪の額なり鬼島崑山は根津の方へ行かんとして通れば胸惡くも深見の二階に蠟燭の影明るくさゝめき笑ふ聲に耳を塞ぎ眼を閉ぢんとせしが生憎に彼の民造の高聲障子を洩れて妹御といふ詞が續けて二つ三つ落ち來れば崑山の足は誰れ命令せねど自づと窓下に止まり耳は正月飾りのソギ竹の如く頭はいつとなく斜めに傾きて十分に力を入れたり眼は當分非職を仰せ付けられて見えもせぬ地面を見つめ肝腎の時に到れば閉ぢられてありしがしばらくすると耳はまた非職となり眼は時めきて勇ましげに瞬き二つ三つして二三歩跡に退きて光らせしは正に今民造が暇を告げて魚淵の家を立ち出づるところなり跡より七八間離れ足音を忍んで塀際を傳ひながら樣子を伺へば民造は何か小唄を唸りながら半町ほど行きしが小石に躓づいてヒョロ〳〵と三四間先へけし飛んだり何か呟やきながら其邊を探り居しが頓て忙がしく元來し方へ取て返しぬ彼奴生醉め煙草入にても落せしか云ば已の望を妨げんとする邪魔の片われ落ちて有らば拾ひ得としてやらんと地を透し見れば物こそあれ取上ぐれば紙入なり元より贋物を書いて口を糊らすほどの横着者なれば四邊を見かへりてチャクと懷中へ收め足を早めて我住む家へ歸りけり

此跡へ提灯點して出來たりしは民造と魚淵にて此所等で轉びかけましたが若や其折でも落しましたか何でも此邊と存じますがと往來を照して探せども無きは道理今拾ひ行きし者ありとも知らず魚淵は眉をひそめ宵暗の此の道落したを知った者でも手輕くは知まい殊更人も多くは通らぬ今の間ハテ不思議な、ハテ不思議な貴君の御宅で何も紙入を取出した事もなしハテ不思議な、兎も角も其筋へお屆け成されたが宜しからう正しい人に拾はれてはや紙入は警察署へ參ッて居るかも知れません、成程左樣致しませう併しお日出度の御使に參ッた今日夫も如何しいハテ酒は怖いものだ、左樣仰せられると御強ひ申した我輩が痛み入るハテとんだ事でござッた

第二十三回

釣り落した鯉は大きく買ひ外した品は安し偖諦らめても出るは愚癡それを抑へて上を望る世の交際の美しさ花を並べし千本の家には妹が婚姻の下約束住田も今が土俵際投げ出されてはと四十八手の祕術を盡し求めて氣を取らぬ振も氣を取る一つの咳拂ひも迂濶にせず眼づかひも方角を兼ね萬事を拋ッて此一事に取掛りたれどお梅の取口大いに違ひ此ごろでは住田が來ても避けて逢はず逢うても兎角口重く進んで話しを仕掛ければ泣出しさうな日和ぐせ女の心は春の空なり、お梅は女權擴張の雄々しきにも似ず鬱陶として物思ひ顏なるは中よきお玉の悦びに付てなり之を嫉むといふにはあらねど一たび我が胸の鏡に寫せし人が召仕の者の太陽となりては其身は此世の光りを失ひし如く嗟嘆の聲の思はずに出でて手足も萎えて何も懶く身を投げかくる安樂椅子安樂のみはなき世なりお玉はまた主人より吉川の事を聞しとき飛立つほどの嬉しさを隱して頻りに辭退せしが浮氣ならぬ眞實話し此事が整うたら我身の上ばかりでなく姉さんも無やさぞ悦びも仕玉はん世間に肩身ゝ廣からん及ばぬ願ひ雲の梯子屆きし事の嬉しやと思ふにつけて何とやらお孃樣の浮かぬお顏解せぬ書物にかこつけてはお出なされど如何やら私の今度の事が御心に掛る御樣子たとひ此身は出世しても御恩になッたお梅樣の胸の惱みの種となッては何より罪の深いことハテ能い思案を姉樣にかりそめならぬ身の定まり氣を弱くはせられぬところ人の恨を受けようとも此身の出世

を……イヤ〳〵如何いふ身分になッたとて中夜の夢に魔はれて汗に襟を浸すやうでは此の結構な世に住む甲斐がない身は低くとも心を安く明らさまに送りたい寧そ此事は堅く斷り餘り遣ッた望みを斷うか……左は左りながら吉川様のやうな御方に連れ添ふは女の中でも女の面目入らぬ義理立は思ひ過し障りなくて婚禮を遂ぐるやう亡き父母に祈りませうと彼方此方へ瀨を分けて心は千々に亂れても末は一つの愛の海渡安かれと願ふなるべし

第二十四回

勢ひ拔けて立歸りし民造は様子いかにと待ち居たる速雄母子の前へ出で滯りなく御使の事は濟みました先方様でも兼て紅梅町様から委しい御話しで殘らず御承知大層お悦びでございましたと云ふに母子も安堵なし夫は大きに御苦勞であッた竹や膳をお運び先づ一杯骨折休めにと云れて民造は頭を搔き酒は戀りました當分禁酒の亂悟でございます、如何したものだ話しをしても涎を垂らすお前が禁酒とは思ひ切ッた事だ何かまた失策でもしたか、先づ其形でございます、民造お前の見たところで妹聖の方は能い方らしいかエ、左様正直らしい人で住居もなか〳〵立派にしてお出でございます、何だか様子が異しいが何か氣になる事でも有ッたか、實は飲醉まして何處へやら紙入を紛失致しました、ヤ夫は大事だ澤山でも入ッて居たか、ヘエ例でございますとお宿を申す惠比須様も少ないのですが生憎地代の集めを御納申すつもりで十八圓ほど入れてございました夫に紙入は貴方からの拜領で夏雄の金物あれを取ッて小ぶりでは有るが煙草入に付けようと思ひましたにとんだ事をしてしまッて實に力が拔けました殊更御目出度の御使で此の失策夫も是も酒の爲でございますから以後禁酒を致しますつもり誠に實に恐れ入りましたとショゲ返るに母子は氣の毒に思ひ今に大かた拾ひ人が出て戻るで有らうそして失くしたは何邊だ、其處がサッパリ分りません池の端の深見様を出まして十間とは歩かぬうち心付いて懷中を探ると無いので行違ッた人もなし是は不思議と深見様へ取て返して若し置忘れたかと聞合せ夫から深見様も提灯を點して共々お探し下されたが御座りません厄落しとも諦らめ兼ねます儀でと溜息つくに速雄母子は何となく心地惡く詞も途切れて民造は立ち歸りたる跡に母子は顔見合せ是だから酒を呑む者は表立た使ひなどに出せません先様でも嘸御心配をなされたらう酒といふものは何に付てもよくないもの失策の種は皆な此滴に滋うて宇を出しますと世間話しに移りけり

第二十五回

千丈の堤も蟻の穴とやら拵へる話しは面倒なれど毀すは早し杉形に積みし俵も隅の一つを外せばグズグズと崩るゝが如く好事魔障多しとやら折角天緣熟せんとせしお玉と速雄の身の上に思はぬ事こそ起りけれ夫は兩人の中にはあらで彼の鬼島昆山なり左せる恨の深見一家にあるにはあらねど只魚淵が元は我れと同等の貧究なりしに突然身を拔いて時めく者となりしより其嫉ましさと二つには口には未だ云出さねどお玉を兼て女房にせんと頻りに魚淵夫婦に取入し事の無益となりし恨より何とかして彼の一家を困らせ元の貧究に落し婚姻破談させあはよくば再び我望みを達せんとの惡心に民造が落せし紙入を拾ひ久しぶりの神功皇后忝じけなしと紙幣は着服せし後ち其晩更けてまた魚淵の家の様子を窺ひ塀の外より殼の紙入を庭へ投げ込みて立歸れり翌朝お鈴が是を見つけマア御覽なさい昨晩お出の方が失くしたといふ紙入が爰に在りました、成程是に相違ない帛紗に包んで結び

び目もしッかりして有るに自まゝに開いて中も改められぬがまだ先方の御當人母御にも御目に掛らぬに已が持ッて行ッて屆けるも異なものだ併し彼方は心配してお出だらうから是は確かに使を撰んで吉川様までお屆け申さう横町の角に出る車夫の中なら間違もなからう正直さうなを呼んで來いと下女に命じて其身は手早く書簡を認め今朝心づけば庭のうちに落ちて有ったゆゑ其儘差出す旨にて小風呂敷にて外包みし大事な品ゆゑ請取を貰ッて來いと云つけやりたり吉川方にては此手紙と包みを請取り夫見よ民造めが酔の紛れに庭へ落して此の手數と心配を掛けたり困ッた者よと早速に呼にやり車夫には祝儀を與へ風呂敷包み一つ確かにと請取を渡して返したれば深見方にては是にて仔細はなき事と安心し噂に出るは酒の事のみなりし紙入が來たといふ知せを聞て民造は飛で來たり誠に申譯もございません全く私の麁相でヘイ是から直に池の端様へ御詫に參りませうヤレ〳〵有難い又お前さんにお目に掛りますと幾度か紙入を押し戴き念の爲めなればと結び目解いて開けて吃驚オヤ、オヤ、オヤとキョロつくに如何した金でも不足して居るか又途中で遣ったのを忘れたのではないかと云れて民造は顔を眺め不足したなら泣ませんが紙幣だけ皆無ございません是はマア如何した事か夢のやうだと手を組むに速雄も不審の眉をひそめ庭に落て居たと其まゝ屆けてよこした中に紙幣がないとは使の者が途中で抜たか上包みの封は其まゝ左様した事は有さうも無がと云に民造は横手を打ち斯か申しては如何なれど考へた事を申さぬもまた如何實は五六日まへ私共から足袋の下縫を受て行く女が金澤町邊にございまして夫が牡丹の繪をかいた羽織の胴裏を持ッて參りまして一圓だが買はぬかと云ふに絖もよし一圓は格外安うございますから何處から出たのだと聞ますと又頼まれゆゑ委しくは知らぬが池の端で上手な繪師で頼まれた絹や絖を賣とかして知らぬ顔は度々のこと隨分惡い事をする者ださうですが盗み品では有りませんといふに身戰ひして歸しましたが若や夫が、コレ何を云ふ人が聞かぬから能いが無暗に饒舌ものではない、デモ急に工面を善したなどは怪しうございます綺麗には云て居ますが何だか支度金が欲しいといふやうな口振もございましたから

第二十六回

住田亮は吉川の紹介にてやゝ心ざす花の下まで至り付き袋ぞ一世の伎倆の顯しどころとわざとお梅には夫ほどに近しくせず先づ兄に說き父と論じ徐ろに我が才學の程を示せば父はいたく感心し今の若き人は我等の時代と比べては頭腦を三つ四つ餘計持ちて生れしやら驚くべき事なりと舌を捲けば兄もまた三年逢はずば刮目して見よとは此男の上なり妹婿として頼もしと心を傾けるがお梅は未だ信用せず成ほど少し輕躁なるは取爲勇壯の精神より沈思默考せられざるならんと察しらるれど何かにつけて妾の旨に適はんとする風情有るは英雄の氣象にあらずいかに妾に心ありてなりと自ら屈して媚を求むるは卑しき業なり斯る人は色衰へ熱冷めては常の者より無情なる振舞をなすものなれば敬して之を遠ざけまた別に良人を撰ぶに如ず殊さらお玉は吉川氏に戀られて目出たき緣を結ばんとするに我身夫より品下りたる人に伴はんは恥しき事なり今一二度近しく逢うてよくよく住田の本心を探り其上にていづれとも身の納りを決せんと密かに胸を定めたり住田はまた種々に工夫をなし下手に容貌を作り急に衣服など花麗にせば却ッて疎んぜらるゝ基なりト云て彼も春待つ花日に麗しきを好まざらんやめかさず機からず其中を執らんものと骨折りしが御祈禱頼み

の病人の如く始めの樣子より次は惡く四度目は三度目よりむづかしく追々否氣な風模樣見えるにぞ沖釣に出て颶風に遭ひしほど驚き何とぞ是を追手に吹き返させんと一夜まどろまずして肝膽を碎き二三日措いて左あらぬ體にまた出かけると此日はお梅もよく住田の本質を知らんと思ひし時なれば先とは變りて愛想よく話しかけるに機を得て住田は得意の辯舌を振ひ諸種の改良論の批評を始めしが終りに至りて近ごろ女子が俄かに目を醒して男女同權など云ふは片腹痛し我輩元より女子を同等の者とは認むれど同權とは意義違へりと口を極めて同權說を駁せしにぞお梅は美しき瞳を見はりていと口惜げに辯解すればまた住田は打ち返し互ひに面を赤め合ふに千本は苦々しく思ひ傍らより詞を交へて外の話しに移らせしが住田は不興氣にて其日は歸り又一日おきて千本を音づれお梅の顏を見ると彼の非同權を繰り返せしがお梅も先の日には我ながら危ふかりし節もありしゆゑ尙ほ熱心に我說を繕ひ置きし所なれば得意に女權を主張して是まで敢て人には云はぬ學びの底を倒まにしたれば流石の住田も辭屈し呼吸もいとゞ急しげにてさし俯向きしがやゝ有りて面を上げ感服したる體にてお梅の顏を眺め敬慕の情を顯はせばお梅も始めて愛慕の情起り手を携へて庭へ出るに千本は案に相違なし跡見送りて獨り言これは妙な事だ今まで喧嘩のやうで有ッたが急に中が直ッた如才ない男に似合はず住田が妹に禁物の議論を向けたは如何した譯かと思ッたが毒藥變じて藥となッた、ハテナ、

第二十七回

障子の紙一枚隔てゝも早や人の影は見えず詞を他人に移しては間違なしとも信ず可からず人傳ならで云ふよしも泣て涙の瀨も盡きてなかなか今は袖滿れぬお玉の身こそ氣の毒なれ吉川よりの下話しに後來朋友の妻となる人と知りては呼び遣ふも憚りあり且つは其支度等いろ〳〵の用事あるべしと千本にては急ぎ代りの女を置きお梅よりは小袖一重ねに兼て祕造の手箱を與へ千本よりもそれ〴〵心付けまた向島に居るお梅の伯母もお玉を可愛き者と云ひていろ〳〵贈物あり悅びに送られて姉の家へ戻り毎日吉川より再度の挨拶を待ちけるが五日過ぎ十日經てど更に沙汰なし魚淵も氣を拔めど此方より催促にも行けず若や紅梅町の方へは話しありしかと夫となくお梅の機嫌を伺ひながらお玉が行きて見れど其の樣子は氣振にもなくお梅は以前と變りて住田と親しみお前のお目出たは何時ごろ私も彼の……何方が先になるだらう先の者が敎師だよといそ〳〵しての物語りイエ此方は何の沙汰もござりませんとも云へず悲しみを隱して姉の家へ歸れど何とやら面伏せ又魚淵夫婦も妹の心を汲み分けては其の事を話し出すも氣の毒にて二階の障子明放しても心は塞がる三人が胸のウヤモヤ立こめて上野の山は霞まれど霞て見ゆる折からに彼の民造が先生は御在宅でございますかとの音なひ鶯の初音と聞なしてサア此方へ漸やく春らしく先づ是へと挨拶やら口誼やらまだ茶も出ぬうち杯盤の響きへイお誂らへと臺所までが俄かに勇み出しぬ魚淵は例の取交せ物などの打合せ又は婚姻の日取りならんと片唾を飲んで其詞を待てど民造は頻りと眺望の景色を褒めまた書かけた枠張の畫を賞し少し途切れて再び時候の挨拶となり元へ戻ッて辨天の境内蓮の時分はさぞ御見事で御ざらう抔と捕へ所なき言を並べ其の合の手に煙草を捻るばかりなれば魚淵は心中大いに不審し此人先づ時候の挨拶濟まば兎も角も此間落せし紙入の一禮を述べ夫より用談あるべきに紙入の事を一句も云ずまた用事も述べざるは偖は緣談變改の使と見えたり此方より求めたる事にてはなく其方より强

て云込みながら今となりて破談などと云ば其分には置くまじきぞと急に身體中へ青い筋が顯はれ吐く息は比良山下しの如くキッと民造の顏を眺めしが幸ひにも此時民造先生は詰ッた煙管の脂を取らんと右の手に遣ひかけの小楊枝を持て下を向き灰吹の蓋を取りし時ゆゑ我が頭の上へ如何なる妖怪が顯はれしかを知らざりし魚淵はわざと面を和らげトキに民造殿定めて今日の御用は結納の儀また日取の御相談で御ざらうが此方は一刻も早きが宜しい總て貴家の御都合にお任せ申す餘の儀と違ッて婚姻は人生の大事遊び事や串戲と一つにされねば我等方にても分相應の用意は早や致しました定て貴家にも御用意は整ひしならん偖何日と御極め下さるぞと嚴格に出られて民造はおびえ上り土氣色と面はなりぬ

第二十八回

疑ひの雲心を掩へば石燈籠も鬼と見え大井の木目も人の顏となる民造はいづれにて聞來たりけんお玉は兼てより鬼島昆山と約束ありしが今富貴の家より婚儀を云入れたるゆゑ俄かに昆山を疎んじ約束を破りたるに昆山は怒り切るの突くのと大悶着掛合中にて候と速雄の母に告げたるにぞ母は大きに驚きて姿形は優しいなれど慾徳づくでは鬼ともなる世の中若し左樣したもので有ッては大變ゆゑよく平生を調べて呉れよと頼みたれば爰ぞ御奉公の仕時と我家を飛び出したれどチト物が承はりたうございます此方の御隣家の畫師は如何いふ者で彼の妹は色男でも御ざりますかと頭から尋ねもならずハテ智慧の有りさうなものと上野の腰掛より池を越して魚淵の二階を遠く眺めながら腕を組んで居ると叩き出しの二子唐棧裾のところの捲くれた羽紬白金巾の小包を背負ッた男と半纏股引出立の者が話しながら連れ立て來たが昆山といふ聲が不圖聞えたので跡について行くと二人は廣小路より三橋へ掛りながら昆山め何で當たか近ごろメッキリ工面を直した深見さんのは腕が有ッて……（此うち水撒に驚いて半纏の男はチョッと揚出しの前の方へ飛びたるが忙がしさうに橋を越して辻雪隱へ立ちて反り身となりぬ）民造は話しの蔓をなくしてはと思へど出たくもなきに小便の連となりては怪しまれん左りとて先へ行き過ぎては惡し立止まッて居るも異なものと思へば入りもせぬ張子の龜の子辻賣の手遊を一錢五厘散財し丁度頃合を計ッてまた跡から付くと先の話しは續かずして豪氣と美しい近ごろ歸ッて居ッてメッキリ器量を上げた彼をサ昆山めが目がけて居る、及ばぬ鯉の瀧登り今度出た應擧物は誰が拵へたのだ……是ぎりにて跡は何の事やら民造には分らず併しながら昆山といふ者とお玉と關係あるは相違なく先端緒を得たりと早速立歸りて此話しに少し味を加へて復命したので母は少し疑ひ出したれば速雄は取らず先日の紙入の事から何となく民造が不快に思ふよりいろ〳〵の妄想を起すは無理ならねど左樣な事はない婦人だ馬鹿を云へ惚れ込む抔といふ事が有る鬼ものか併しだん〳〵考へると深見魚淵といふは入谷の岩田さんの御近所に居た人で既に一度店の藤兵衛が云付て竹松を使にやッてとんだ失禮をした人なれば何事も岩田さんが御存じで有らうと實は此間入谷まで尋ねたが生憎熱海へ湯治に行かれた跡で有ッた疑ふなら岩田さんの歸りを待ッて仔細をお聞き申すが宜い人の噂は聞所に依ッて違ふもの況して通りすがりの話しなどは迂闊に信じらるゝものでないと云破りたれど母親が危ながりて大事を取るにぞ然らば四五日期を延し岩田さんのお歸りを待たうと偖こそ民造を魚淵方へ使によこしたるなり民造は甘く文どッて日延させいよ〳〵惡き時には破談にする下地を作ッて置かんといろ〳〵

軍略を貯へて來たりしなれど魚淵の樣子に氣を呑れグット詞は支へて實はナニ母親樣が實は御病氣に付きまして御目出たの事ゆゑ實は御床上げイエ夫ほど重病でもござりませんが夫ゆゑ實は今日は其事を御斷りの爲め參上致しましたいづれ近日改めて申上げますと逃ぐるが如く同家を立ち出で冷汗を拭ひながら吉川へ來て其の模樣を話す折ふし岩田善庵でござる久々御不沙汰仕ッたといふ聲オヽ幸ひと奥へ請じたり

第二十九回

トント打絶えてイヤ誠に御無沙汰御母公も御壯健何とか申すものゝ醫師などは餘り近しく參らんが御目出たい仰せの如く……御詞の通り……イヤモ相變らずで然し此の元氣が衰へては岩田善庵も永くはござらぬ左樣いつ上りましたかナニアノ御兄樣が米國へお立ちのとき伺ッたぎり下せば御兄樣も御健勝で夫は何より何時ごろ御歸朝ハヽア本年中は夫はなか〳〵シテ貴方もナル御兄樣と御交代イヤ中々御緩りとは參りませんな併し我々から思へば何か海外へ參るといへば生を變へる程に存ずるが貴君方では天涯比隣いかさま夫ほどの大腹中で在らせられなくては成程ハヽア、で、ござりますか……左樣—愚老も熱海入浴全體醫師が湯治に參るといふはチト異な譯でござるが自分の病氣は自脈ではいけません夫にナ實の所を申せば未熟な者に試されるよりは柔かに湯治などの方が宜しうござる自家撞着と申せば昨夜戻りました年々によくなりますは湯治場イヤモ大繁昌此うへ鐵道の便が付きましたら尙さらの事でナニ、其事で……ハヽア……拙宅へお尋ね下された……生憎不在で恐縮千萬……是は目出たい……定て悦び……夫はとんだ……ハヽア……と云お話で……成程……是は怪しからん……どうも不思議……其お話しで皆分りました……よい所へ參り合せた……彼の深見と申す者は誠に感心な者で決してどう致して成ほど仰有る通りお玉といふ妹これも感服な者で拙の宅へは毎々遊びに參ッてよく存じて居ります御隱居ナニ御母公御安心なさい彼の娘なれば斯く申す岩田善庵何所までも御請合申す憎い奴は其の鬼島昆山と申す者で愚老も兩三度魚淵方で出合ひました業體に似合はぬ奴で實は不在中度々魚淵より尋ねて呉れましたので今朝池の端へ參りましたところ丁度其の昆山の噂でお聞きなされ繪を書いては迚も世を過ぎられぬと思ッてか恐しい事を巧みましたナニカ紙幣を拵改て十錢を半圓に遣ッたとやらで昨夜捕縛になッたとのこと苟しくも風流韻事の片端をも解した者がいかに窮すればとて情ない譯で憎い奴で中々妹と關係が有る抔とは以の外怪しからん事必竟間の話しが屆かぬからの間違御母公御安心なさい不肖ではござれど是は愚老が御媒酌申す事に仕りませう然し此の御席へ參り合せて斯く事情がサラリと分るといふも御緣のある事で……成程……其邊も承知致しました……成程大きに左樣で……宜しう御ざる善は急げ……夫では深見方でも嘸立腹イヤナニ心配致して居りませう斯樣な事は隱さずに手遣ひの次第を申すが宜しい直に池の端へ參ッて是にも安心させませうイエ夫はイヽエ御酒はまた立歸ッて緩りゝ頂きませうアヽお送り下されては恐れ入る御母公は其まゝに是は民造殿大きに失禮ナニ車をお命じ下されたか恐縮な儀で

第三十回

一度は已も彼樣した事が有ッたッけと油園の掛ッた釣臺を見て懷舊の水涕を啜る老人も彼娘にせうか此の女と極めようかと先は知らぬに獨極めの若者も一寸ふうちやん御覽なさい立

派だことどれがお嫁さんだかツイ顔を見ませんでしたよとけなりがる娘もマア綺麗に頭の物ばかりでも大變な直打だよと下卑た所へ氣の付く年増に至るまで一種いふべからざる趣きを此の婚姻といふ事に置くは面白き事なり傍で見るさへ斯ばかりなれば其の當人の胸の中いかなる烈女豪傑もドキリと洪濤の打ち寄せて紅の潮美しき面にさすこと一度は有るべし有るべかゝりの式作法爰に申すも管といふクダは目出度此の宴席に憚りある事なれば高砂の尉の熊手をかりて松の葉ならねどザットかくべし

岩田善庵の骨折にて事はサッパリと埒明き夕立の跡の空と晴れ渡りたれば又もや雲のかゝらぬうちと日取を定めて深見方より練り出せば吉川方にも待ち女郎介添酌人居並びていと賑はしき座敷の飾り親類緣者きら星と輝く中の月と日の速雄お玉はまばゆくて互ひに顏を見合せ得ず初々しさも座の花かその玉椿の八千代までと祝ひ納めけるとなん

お梅は西洋の法式に倣ひ兼て信ずる耶蘇教師の前に於て婚姻の禮を誓ひ夫より盛んなる祝宴を開きて親族知己に披露せんと其の催しの支度に手間取れ且つは住田の現在の住居は多くの客を招ずるに適せねばお梅が爲の資産金六千圓のうち三千圓にて西洋風の家を建築せんと專ら地所を撰むうち住田は俄かに海外派遣の命を請け幸ひお梅も一たび臨洲の地を踏みて彼の國の貴女の風儀を見んとの念ありしゆゑ盛宴は歸朝の後ちの事となし吉川方の悦びよりわづか後れて結婚の禮式だけを濟せ夫婦手を携へて雲煙萬里の濤の上蒼茫千重の山を見る遙けき旅路へ出立けり是も目出度し是もめでたし